岡山県の栄養士養成施設における女子学生の職業観

光森女里　沖田美佐子
吉田繁子
菅　淑江　（中国短期大学）

Ⅰ　はじめに

栄養の改善指導推進者である栄養士の発祥は，大正年間にさかのぼるが，昭和22年栄養士法施行以来その数は逐年増加し，25年を経過した今日では，栄養士養成施設も全国258に及び，毎年２万名以上の栄養士が誕生すると推定されており，現在の有資格者は約16万名といわれている。

岡山県下においても，昭和21年に１施設が栄養士の養成を始めて以来，現在では７施設となり，年間約550名の栄養士が誕生している。このように近年栄養士の有資格者は増加の傾向にあり，栄養士として働く意志があるにもかかわらず，各職場における充足状況は十分といえない。このことは養成施設の教育制度や学生の質的問題が，職場とはあい入れない面があると同時に，栄養士に対する社会的評価の低さも原因していると考えられるが，一方入学する学生の栄養士に対する職業観も大きな要因となっているのではなかろうか。

われわれは，この観点から学生の職業観を中心とした意識について調査したので，その結果を報告する。

Ⅱ　調査対象および方法

調査対象：岡山県に所在する５短大，２大学の栄養士養成施設に在学する１年次生，および最終年次生，計930名を対象とした。有効回収数は848名（回収率90.1%）であった。
調査方法：アンケート式による留置調査とし，無記名で回収した。
調査時期：1970年10月。

Ⅲ　調査成績および考察

1.　栄養士養成課程を志望した動機

栄養士養成課程を志望した動機は，表１に示すとおりである。

表1　入学目的（%）

学校 / 学年 / 回答	短期大学		大学	
	1	2	1	4
栄養士資格取得のため	77.6	80.5	54.6	60.2
栄養士資格は第１目的ではない	22.3	19.2	45.4	35.6
無回答	0.1	0.3	0	4.2

栄養士資格を取得することを目的とするものは，短大では79.0%，大学では57.4%で，短大

が多く，栄養士資格取得が志望の第一目的ではないものは，短大では20.8%，大学では40.5%であった。これによれば，短大の職業教育性が期待されていることが予想される。入学年度による差については，最終年次では記入時の主観の介入が予想されるが，差はあまりなかった。

さらに，栄養士資格活用という点から，栄養士養成課程を選択した理由を分析すると，学校差はかなりみられるが，表2に示すとおりである。

表2　選択した理由（1項目についての%）

学校 / 学年 / 回答	短期大学		大学	
	1	2	1	4
栄養士として働くため	36.6	41.4	52.3	33.6
いざというとき役立つ	72.2	71.9	63.6	50.5
自分の性格に適する	11.2	7.3	18.2	6.8
教養のため	14.1	16.6	11.4	23.1
結婚後役立つ	57.1	49.7	40.9	30.1
女子に適する	10.6	11.1	4.5	8.0
なんとなく興味がある	14.4	22.5	34.1	25.4
その他	3.7	3.4	2.3	4.1

各項目別に比較すると，栄養士資格を活用しようとするものは，短大では55.5%，大学では50.1%となり，その差はほとんどみられない。そのうち，〝資格をもっていればいざというとき役立つ〟（潜在志向）は，短大では72.0%，大学では57.1%で，〝栄養士として働くため〟（積極志向）は，短大では39.0%，大学では43.0%となり，短大のほうが積極志向は強いであろう，という筆者らの予想は裏切られたようである。

〝結婚後役立つ〟という項目は．短大では53.4%，大学では35.5%で，短大のほうが家庭志向の度合いが強くあらわれている。栄養士養成課程選択において影響した因子としては，本人の自覚によるものが54.5%でもっとも強く，母親の影響が25.4%でそれにつぎ，父親の影響が10.4%，教師の影響が5.7%，兄弟，先輩，友人の影響が計4.0%となっており，沢野氏らによる東京都内および周辺都市の各種学校，短大，および大学を対象校とした調査結果と同様な傾向がみられる。

入学時に，栄養士業務内容をどの程度理解していたかをみると，表3に示すとおりである。

表3　入学時における栄養士業務内容の知名度（%）

学校別平均 / 回答	短期大学	大学
仕事の内容を十分知っていた	2.8	3.5
仕事の内容を少しは知っていた	93.6	91.7
仕事の内容をまったく知らなかった	3.6	4.8

短大と大学による知名度の差はほとんどみられず，栄養士業務内容を〝まったくしらなかった〟のは，短大，大学ともに5%以下であり，95%強が〝十分知っていた〟〝少しは知っていた〟で大部分のものが，栄養士業務内容に対する知識をもって入学したことになる。

2.　栄養士教育内容および期間

栄養士教育内容については，表4のように〝栄養士として十分働ける〟〝十分ではないが基礎はできる〟とするものが，短大と大学では差があり，短大では2年次67.3%—1年次75.3%

表4　栄養士教育内容（%）

学校 / 学年 / 回答	短期大学		大学	
	1	2	1	4
栄養士として十分働ける教育内容である	6.0	1,4	4.8	3.5
栄養士として働く基礎はできる	69.3	65.9	39.0	57.3
栄養士として働くには不十分である	17.2	26.8	29.3	35.8
栄養士教育にかたよりすぎる	5.5	4.0	14.6	3.4
その他	2.0	1.9	12.3	0

で平均71.3%と多く，大学では1年次43.8%—4年次60.8%で平均52.3%となっており，また〝働くには不十分である〟が短大では22.0%，大学では31.7%となっている。これは学校差もあるが，卒業後の職業として栄養士を主体とする短大に対し，大学では教員となる学生が主であるために，教育側，学生側ともに潜在的な意識が大きくあらわれていると考えられる。これが原因となり，〝栄養士教育にかたよりすぎる〟というものが，大学1年次で14.6%と他にくらべて高く，〝その他〟の中に「職場の仕事と教育内容が一致しない」という回答があらわれているものと思われる。また，大学における栄養士教育が家政科教育の一部としての位置づけにも，これが専門教育としての確立と相いれないところとなっていることも指摘できよう。

表5　栄養士教育の修業年限(%)

学校 / 学年 / 回答	短期大学		大学	
	1	2	1	4
長すぎる	2.2	0	14.6	14.2
短かすぎる	55.8	77.7	4.9	4.7
適当である	26.5	18.5	43.9	48.0
わからない	15.5	3.8	36.6	33.1

次に，修業年限が適当であるかどうかについては，表5のように短大と大学の両者ではあきらかな差がみられ，〝2年間では短かすぎる〟という意向が示され，特に2年次では77.7%と，先に〝働く基礎はできる〟と答えながらも，職場にのぞむ不安があらわれているようである。大学においては平均46.0%が〝適当である〟にもかかわらず，〝わからない〟が34.7%となっているのは，表4にある〝その他〟の項に「職業学校的である」「教育内容がうわすべり」という回答もあることから，〝わからない〟という回答が高率を示したといえよう。

管理栄養士に将来なりたいかについては，それぞれ1年次で短大37.5%，大学73.4%と，大学において約2倍のものが望んでいるが，最終年次では，短大42.3%，大学40.4%とほぼ同率となっている。これは大学においては，入学時に無試験管理栄養士取得要素を多分に望んでいたにもかかわらず，卒業後の職場が教員であり，管理栄養士の活用がほとんどなされていない現状を，教育期間中に知見した結果，最終年次に低率になったと考えられ，卒業時に管理栄養士取得のできない短大生が，管理栄養士になりたい希望が最終年次に4.8%増となっていることは，教育制度と学生の職業志向が一致しない問題点をここに端的に示している。

3. 栄養士の評価

栄養士の社会的役割をどのように評価しているかについては，表6のとおりである。

表6　栄養士の仕事に対する評価(%)

回答＼学校		短期大学		大学	
	学年	1	2	1	4
社会的役割	非常に重要	53.9	59.7	57.9	32.8
	やや重要	30.5	26.9	24.5	30.7
	普通	9.3	6.5	10.9	18.2
	重要でない	3.8	5.7	4.6	0
	わからない	2.5	1.2	2.1	18.3
賃金	非常によい	0.5	0.5	0	0
	ややよい	5.1	2.5	4.9	0
	普通	22.5	21.3	20.2	17.5
	やや悪い	26.4	43.3	28.2	40.6
	非常に悪い	21.6	25.8	10.5	23.2
	わからない	23.9	6.6	36.2	18.7

全体として75.3%の学生が〝非常に重要〟〝やや重要〟と答えている。しかし，大学最終年次では，63.5%が〝重要〟と答え，18.3%が〝わからない〟と評価していることは，「栄養士の社会的役割の重要性は高いと思うが，学外実習等で接した栄養士の業務内容，社会的地位等から栄養士への疑問は大きく深くなる一方」と記入した学生がいることを考えると，理想と現実の差の大きさを表わすものと思考される。

賃金については，〝非常によい〟〝ややよい〟と答えたものが3.4%と少なく〝普通〟は20.4%であり，〝やや悪い〟〝非常に悪い〟が52.4%で半数をしめている。

学外実習を終えて，現場栄養士と接する機会を得た最終年次生の66.4%が〝やや悪い〟〝非常に悪い〟と回答していることは，社会的役割に対する意識と同様な影響があるものと考えられる。

4. 職　業　観

表7　就職希望の有無(%)

回答＼学校		短期大学		大学	
	学年	1	2	1	4
就職したい		87.4	93.7	88.3	94.2
	栄養士として働きたい	69.0	74.5	59.3	37.0
	栄養士として働きたくない	14.0	18.2	18.1	40.9
	わからない	17.0	7.3	22.6	22.1
就職したくない		2.5	2.6	1.1	4.1
わからない		10.1	3.7	10.6	1.7

就職希望は，表7に示すように，短大，大学ともに約90%で，大部分が働く希望を持っている。そのうち，〝栄養士として働きたい〟ものは短大71.8%―大学48.2%である。特に短大では1年次よりも2年次が5.5%増に対して，大学では4年次になると22.3%減と非常に少なくなり，逆に，〝栄養士として働きたくない〟ものが22.8%増となっている。〝栄養士として働きたい〟と答えた理由としては，短大，大学ともに〝やりがいのある仕事だから〟〝女子の仕事

として適している”“自立できる”が大半をしめ，“免許をとったから働く”と答えたものは，意外に少なかった。

“栄養士として働きたくない”と答えた理由は短大，大学ともに大半のものが“社会的地位が低い”“仕事がきつい”と答えている。これは，栄養士の業務内容に対する不満，社会的評価の低さが原因と考えられる。

表8　栄養士として働く場合の条件(%)

学校	短期大学	大　学
回答　学年	2	4
業務内容	19.7	19.7
賃金	17.8	17.1
労働時間	16.6	17.7
設備	15.1	16.0
規模	11.5	10.6
給食数	6.2	5.4
給食関係者数	5.4	5.8
早朝勤務の有無	3.8	1.9
住み込みの有無	3.1	5.2
その他	0.8	0.6

また，栄養士として働く場合の条件として何をもっとも重視するかの設問については，表8のように，全体として業務内容，賃金，労働時間，設備，企業の規模が上位をしめている。これは，待遇改善とともに専門技術職として，栄養士の地位の向上，業務内容の確立がなされなければならないことを示している。

栄養士として勤務を希望する職場は，表9のとおりである。

表9　勤務を希望する職場(%)

学校	短期大学		大　学	
回答　学年	1	2	1	4
病院	19.2	44.2	21.7	47.9
学校	22.3	15.3	7.3	5.9
会社・工場	15.6	10.1	12.0	5.7
養護施設	2.4	6.6	4.7	3.0
研究所	11.9	5.1	25.6	8.5
料理教室	5.5	4.9	0	3.0
保健所	6.2	2.5	5.4	11.6
保育所	7.3	2.5	3.2	5.7
教育関係	1.4	2.0	9.0	3.0
その他	8.2	6.8	11.1	5.7

短大では，病院，学校，会社，工場が多く，大学では病院，研究所，保健所が多い。大学で保健所栄養士を希望するものの多いのが注目されるが，地域社会の栄養改善指導者として高度な技術と知識を要求され，管理栄養士が望ましいとされていることからも当然なことである。1年次と最終年次を比較すると，最終年次では病院が大巾に増加し，学校，会社，工場，研究

所は減少している。これは一年次の時は漠然と職場に対するイメージをいだいているのが，最終年次になると，学外実習，その他で職場の現実を知り，また，栄養士の就職状況を知ったためであろう。〝その他〟は給食センター，製品の指導販売など最近ふえつつある職場であるが，学生の希望数は低率であり，今後開拓されるべき施設であることが指摘される。

表10　栄養士としての適正（%）

回答＼学校	短期大学		大学	
学年	1	2	1	4
非常にむいている	2.9	0.6	0	0
ややむいている	12.0	13.2	15.8	4.7
普通	44.1	37.6	41.3	49.0
ややむいていない	17.2	22.5	12.9	24.9
非常にむいていない	7.7	7.2	8.3	8.8
わからない	16.1	18.9	21.7	12.6

表10は栄養士としての適性を自己評価したものであるが，〝非常にむいている〟〝ややむいている〟と考えるものは，わずかに短大14.4%—大学10.3%である。〝ややむいていない〟〝非常にむいていない〟と考えるものが短大27.3%—大学27.5%で，残りの短大58.3%—大学62.2%は〝普通〟〝わからない〟で，むいているともむいていないとも明確に自己評価できなかった。これは，教科内容と現実の職場における業務内容とがかけはなれているため，栄養士として働くだけの自信がないためではなかろうか。

表11　職業と結婚についての意識（%）

回答＼学校		短期大学				大学			
学年		1		2		1		4	
仕事をつづける	栄養士として	20.0	51.6	17.0	48.1	24.3	39.0	37.5	16.7
	栄養士以外でもよい		32.2		34.6		44.3		50.0
	栄養士以外		12.9		17.3		16.7		33.3
	その他		3.3		0		0		0
結婚まで仕事をつづける	栄養士として	32.9	19.2	34.0	24.0	27.0	25.0	33.3	6.3
	栄養士以外でもよい		68.2		63.5		65.0		37.5
	栄養士以外		11.6		10.5		10.0		56.2
	その他		1.0		2.0		0		0
出産まで仕事をつづける	栄養士として	10.4	36.4	11.8	27.8	9.5	43.0	10.4	40.0
	栄養士以外でもよい		57.6		58.3		14.3		20.0
	栄養士以外		6.0		13.9		14.3		40.0
	その他		0		0		28.4		0
出産まで，後再就職する	栄養士として	36.7	40.5	37.2	43.9	39.2	51.7	18.8	22.2
	栄養士以外でもよい		53.5		47.4		34.5		22.2
	栄養士以外		5.2		7.9		6.9		55.6
	その他		0.8		0.8		6.9		0

表11は，自分の職業生活と結婚生活をどのように考えるかを表わしたものである。〝ずっと

仕事を続ける″は短大18.5%—大学30.9%で，大学のほうが職業志向が強い。そのうち〝栄養士として″は短大49.9%—大学27.9%で短大が22.0%も多い。それに対して〝栄養士以外″は短大15.1%—大学25.0%で，栄養士志向は短大に強い。また，〝出産まで仕事をし，育児後再就職する″は短大6.9%—大学29.0%で，そのうち〝栄養士として″は短大42.2%—大学37.0%である。このように，短大では職業志向の強さは，栄養士志向の強さとなるが，大学では職業志向の強いものは栄養士以外を志向するようである。〝結婚まで仕事を続ける″〝出産まで仕事を続ける″は短大44.6%—大学40.1%で大差なく，短大，大学ともに，職業生活は一時的なものと考える傾向がうかがわれる。

Ⅳ おわりに

岡山県に所在する5短大，2大学の栄養士養成施設に在学する1年次生，および最終年次生，計848名について職業観を中心とした意識調査を行なった。

1） 栄養士養成課程志望動機は，資格取得を目的とするものが，短大79.0%，大学57.4%で短大が20%程度多く，将来資格を活用しようというものも短大のほうが多い。

2） 栄養士養成課程選択に関しては，本人の意志によるものが54.5%でもっとも強い。

3） 入学時における栄養士業務内容知名率は，約95%である。

4） 教育内容に対しては，働ける教育内容である，および働く基礎はできると答えたものが，短大71.3%，大学52.3%で，短大が約20%多く，働くには不十分であるとするものは大学のほうが10%程度高い。また，栄養士教育にかたよりすぎるが，大学1年次が他に比べて約3倍をしめている。

5） 修業年限については，短大では短かすぎるが，66.8%をしめ，大学では適当であるが，46.0%となっている。

6） 管理栄養士に将来なりたいかの設問には，1年次，短大で37.5%であり，大学では約2倍の73.4%が望んでいるが，最終年次になるといずれも約40%となっている。

7） 栄養士の社会的役割については，全体として約80%が重要と答えている。賃金については，55.0%が悪いと評価している。

8） 就職希望は，全体として約90%であり，そのうち栄養士として働きたいものは短大に多く，大学では少ない。

9） 栄養士として働く場合に重要視する条件は，短大，大学ともに業務内容が第一で，次いで賃金，労働時間，設備である。

10） 勤務を希望する職場は，短大では病院，学校，会社，工場が多く，大学では病院，研究所，保健所が多い。

11） 栄養士として適性があると考えているものは，全体として12.4%と低く，普通，不適が約70%をしめている。

12） 職業生活観については，生涯仕事を続けようと考えているものが大学に多いが，そのうち栄養士としての職業志向は短大が強い。全体的にみて，結婚あるいは出産により仕事をやめるものが42.4%あり大半をしめる。

文　献

1） 沢野，太田：栄養士養成施設女子学生の職業観，第16回日本栄養改善学会：昭和44年。

2） 園田直人，他：栄養士の社会学的研究第2報，臨床栄養，34(3)：昭和44年。

3）　沢野勉：栄養士養成施設女子学生の職業観，臨床栄養，36(6)：昭和45年。
4）　園田真人，他：栄養士の社会学的研究第３報，栄養日本，13(4)：昭和45年。
5）　厚生白書：栄養日本，14(1)：昭和46年。
6）　萩原八重子：巣立ちゆく栄養士，食生活65(3)：昭和46年。